わが街わが故郷

日本ピローブロック株式会社
名古屋支店とその周辺地域

会社名

日本ピローブロック株式会社名古屋支店

所在地

愛知県名古屋市熱田区二番二丁目１－２

弊社は1946年に「小林鉄工所」として創業、1950年に日本で初めてピローブロック（転がり軸受ユニット）の生産に着手いたしました。当初はユーザーに馴染の薄かった、単列深溝ベアリングとケースの一体型であるピローブロックですが、同業他社と切磋琢磨し、広く認知される商品に成長してまいりました（1966年に日本工業規格表示工場の許可を取得）。

2004年には「日本ピローブロック製造株式会社」と「日本ピローブロック販売株式会社」を合併し、現在の「日本ピローブロック株式会社」を発足。名古屋支店は、1962年に中京・北陸地区のアフターサービス機関として「名古屋営業所」が開設され、1970年に名古屋市熱田区の現在地へ移転、その後支店へと昇格し現在に至っています。

今回は、名古屋支店の所在地である熱田区周辺について簡単にご紹介いたします。

熱田区

熱田区(あつたく)は、名古屋市を構成する16区のうちの１つで、古くは東海道五十三次の宮宿の宿場町、熱田神宮の門前町として栄えた場所です。名古屋市の区制施行に際して南区として発足し、1937年に現在の熱田区となりました。

区内には、熱田神宮を始め断夫山古墳や白鳥古墳、また、江戸時代に街道一の賑わいをみせたといわれる宿場の面影を残す七里の渡し船着き場跡(宮の渡し公園内)など、歴史的文化遺産が数多く点在しています。

大型施設としては名古屋国際会議場があり、また名古屋名物として有名なひつまぶしの「あつた蓬莱軒」の本店があります。

熱田神宮

熱田神宮は伊勢神宮につぐ大宮で三種の神器の一つ草薙の剣（くさなぎのつるぎ。天叢雲剣）を祀る荘厳な神社です。

その昔、東国を平定した日本武尊が帰路、尾張国造の姫を娶ったが戦いの途中で亡くなり、姫は武尊を奉るため熱田に社を建立し神剣草薙の剣を奉納したのが、熱田神宮の起源とされています。

以来、伊勢の神宮につぐ格別に尊いお宮として篤い崇敬をあつめ、延喜式名神大社・勅祭社に列せられ国家鎮護の神宮として特別の取り扱いを受ける一方、「熱田さま」「宮」と呼ばれ親

熱田神宮

しまれてきました。2千年にわたる篤い信仰の歴史を物語るものとして、皇室を始め庶民に至る多くの崇敬者からの奉納品4千余点が、宝物館に収蔵展示されています。

6万坪の境内には大木が生い茂っており、クス・ケヤキ・カシ・シイ・ムク・イチョウ・クロガネモチなど比較的広葉樹が良く育ち、特にクスは巨木が多く、樹齢千年前後と推定されるものが数本あります。有名な木としては、弘法大師お手植と伝えられる「大楠」、花が咲いても実のならない「ならずの梅」、茶人の愛好する「太郎庵椿」などがあります。古来「蓬莱島(ほうらいじま)」の名で知られ、大都会の中心にありながら静寂で厳かな雰囲気が漂い、四季の装いあふれる市民のオアシスとして親しまれています。

境内外には本宮・別宮外43社が祀られ、主な祭典・神事だけでも年間70余度、昔ながらの尊い手振りのまま今日に伝えられています。

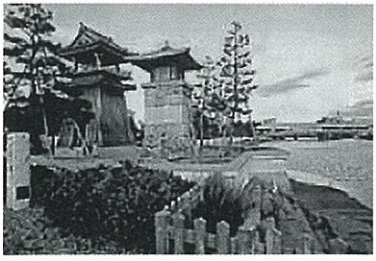
宮宿（七里の渡し）、宮の渡し公園

宮宿（みやじゅく、宮の宿、熱田宿）は、東海道五十三次の41番目の宿場で、揖斐川河口にあり、東海道五十三次の42番目の宿桑名の玄関として尾張熱田の宮から海路七里あったところから俗に「七里の渡し」と言われました。七里とはその距離約28㎞で、当時は3～4時間をかけて渡ったと言われています。これより伊勢路に入るためこの大鳥居は「伊勢の国一の鳥居」と称されています。

宮宿は東海道の脇街道であった佐屋街道、大垣を経由して中山道垂井宿に向かう美濃路が分岐し、しかも七里の渡しもあったことから当時は大いににぎわい、旅籠屋の数は東海道で最大で、本陣も2軒ありました。また、熱田神宮の門前町でもあり、尾張藩により名古屋城下、岐阜と並び町奉行の管轄地とされていました。

宮の宿側の船着場跡は、1983年に「宮の渡し公園」として整備され、常夜灯や時の鐘、道標など松並木とともに旧街道の歴史を伝えています。また現在でも、折りにふれて桑名～宮間を遊覧船で渡る「現代の七里の渡し」が行われています。

犬山城主で尾張藩家老だった成瀬氏が寄進した常夜灯がかつての渡し場付近に残っており、当時の宮宿の繁栄ぶりを今にとどめています。



宮の渡し公園

名古屋国際会議場

名古屋国際会議場は、名古屋市熱田区熱田西町の白鳥公園内にある大規模多目的ホールで、1989年に名古屋市制100周年を記念して開催された世界デザイン博覧会で建設・設置された白鳥センチュリープラザを再利用して、1990年に日本最大級のコンベンション施設として設置されました。

客席数3000席を備えるセンチュリーホールのほか、イベントホール、国際会議場、3つのレ

ストランを備えており、国際交流の場として国際会議・式典・コンサートなどに広く利用され、名古屋の中核施設となっています。

また、中庭にはレオナルド・ダ・ヴィンチの幻の作品であるスフォルツァ騎馬像があります。中庭に面して立つこの巨大な騎馬像は、世界デザイン博覧会の創造工房東海銀行館に出展されたもので、イタリアルネッサンスの巨匠レオナルド・ダ・ヴィンチが作り上げようとしたブロンズ像のレプリカです。レオナルド・ダ・ヴィンチは、ミラノ領主ロドヴィコから世界最大のフランチェスコ・スフォルツァ将軍の騎馬像製作を命ぜられ、1493年11月に馬だけの粘土像（7.2m）を完成させました。しかし、戦争でブロンズの鋳造は断念され、この粘土像もその後破壊されてしまいました。

スフォルツァ騎馬像

世界デザイン博覧会への出展に際してこの幻の騎馬像を再建させるため、1967年に発見されたマドリッド手稿や残された数々のデッサンを参考に、まず2mの原形を粘土で創作し、これをコンピューターで拡大し、ブロンズでは脚部が重さに耐えないため強化プラスチックで仕上げられています。

ひつまぶし

ひつまぶし（櫃塗し）は、主に名古屋地方で食べられている鰻料理で、蒲焼にしたウナギの身を細かく刻んで御飯に乗せたもの。茶碗3-4杯分のご飯の入った小ぶりなお櫃（ひつ）に入れて供されるため、こう呼ばれています。

ひつまぶしの楽しみ方は、以下の手順による「1回で3度おいしい」食べ方にあります。

①最初はそのまま茶碗に一杯取り、そのままいただきます。

②次はおかわりのように2杯目を取り、薬味をのせて食べる。薬味としては葱・山葵・海苔が基本で、ウナギによく合う3種で、これらにより味の変化を楽しみながら味わいます。

③3杯目は2杯目のようにしたものに、お茶（煎茶）もしくはだし汁をかけ、さっぱりとお茶漬けのようにいただきます。

※あつた蓬莱軒によれば、まずお櫃に上から十字に四等分するようにしゃもじを入れ4杯分にわけて、上記のように3種類の食べ方を楽しみ、最後に一番好みだった食べ方をもう一度楽しむことがお薦めのようです。

ひつまぶし

名古屋の蒲焼は関西風と同様に蒸さずにそのまま焼き上げるので、皮は程よく焦げ香ばしく、身はふんわりと柔らかくなります。そのまま食べるのはもちろんのこと、お茶漬けにも最適です。名古屋へお越しの際は一度お試しあれ。

（日本ピローブロック株式会社
名古屋支店　福原 良平）